

令和 6 年 6 月 20 日現在

機関番号：12102

研究種目：基盤研究(C) (一般)

研究期間：2019～2023

課題番号：19K00149

研究課題名(和文) 足跡の芸術 リチャード・ロングの歩行作品における「消散」と「不完全性」の美学

研究課題名(英文) Art of Footprints: Aesthetics of Disappearance and Imperfection of Richard Long's Walk-Works

研究代表者

山口 恵里子 (Yamaguchi, Eriko)

筑波大学・人文社会系・教授

研究者番号：20292493

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 3,300,000円

研究成果の概要(和文)：イギリスの彫刻家・美術家であるリチャード・ロングは、歩行中に会った場所での場にある石や流木などを並べたり、積み上げたりした「彫刻」を制作する。目に見えない「歩行」を目に見える形にしたその彫刻は、やがては形を失い、消散する。ロングは、このような永続せず、形を残さない彫刻の「不完全性」を重要視している。本研究は、こうしたロングの歩行作品における消散と不完全性の美学を追究した。研究期間中に日本国内で制作された作品を調査したほか、イギリスでは、ロングが彫刻を写した写真や、テクニクワークを実見し、文献調査も実施した。成果は、論文(編著に所収)として発表したほか、2本の英語論文としても発表予定である。

研究成果の学術的意義や社会的意義

リチャード・ロングは日本を度々訪れ、各地を歩いて作品を制作している。日本の美術館で開催されたロングの展覧会や、美術館で行われた作品制作の際に論考や図録が出されているが、それ以外の機会ではロングの芸術に関する研究は日本ではまだ多くは出されていない。本研究は、日本で制作されたロングの作品も考察の対象としている。本研究の成果により、日本内外に、日本で制作された作品も含むロング作品の意義を伝えることが可能になった。本研究は、ネットワークで繋がれた現代社会において、ロングが歩き続け、形を残さない彫刻を制作し続けている意味を問うことにより、人間の身体と地表との関係、自然の中の人間存在の意味を再考した。

研究成果の概要(英文)：British sculptor and artist Richard Long makes sculptures, walk-works, for places he encounters during walks, using materials available there, such as stones, sticks, driftwood, grass, snow, and mud. These sculptures will, however, soon disappear or disperse. Such walk-works challenge what is expected of sculpture canonically, and demonstrate the aesthetics of impermanence. This research explores the aesthetics of impermanence and disappearance in Long's sculptures through studying his walk-works created in England and Japan. Publications of research achievements include an article in Japanese, "Ashi no Ato, Te no Ato, Iki no Ato: Richard Long no Chokoku niokeru Shosan" ["Footprints, Handprints, and Trace of Breath: Disappearance of the Sculpture of Richard Long"] published in my co-edited book, *Forms of the Everyday: Art, Architecture, Literature, Cuisine* (University of Tsukuba Press, 2023), and two articles in English (forthcoming).

研究分野：イギリス美術

キーワード：リチャード・ロング 歩行 彫刻 消散 不完全性の美学 身体

## 1. 研究開始当初の背景

イギリスの彫刻家・アーティストのリチャード・ロング (**Richard Long 1945** 年生)は、**1960** 年代以降世界各地の地表を歩き、その歩行に基づく作品を制作している。作品には、ロングが歩行中に会った場所の石や流木を用いた彫刻、それを撮影した写真、歩行ルートを記した地図作品、歩行中出会ったモノや動物の名前などを並べたテキストワークがある。これらの作品はいずれも「目に見えない」歩行や、まもなく消えてしまう足跡を可視化したものだが、彫刻を形作る流木や石も時の経過とともに散らばり、彫刻でさえ跡形もなくなってしまう。ロングの「彫刻」は、マテリアルとフォルムを保持するものだという彫刻の概念に抗う。ロングは、こうした消散する「不完全な」彫刻を制作することによって、「完全性」ないしは「永続性」をキャンノンとする芸術に疑問符をつけたのである。またロングは、自らの歩く身体と風景が関わる「場所」を彫刻によって束の間現すことにより、人間が地表を歩き続ける意味、人間と自然との関係、そして人間が存在する「場所」の意味を問っている。

このようなロングの芸術について、**R. H. Fuchs** の *Richard Long (1986)* をはじめとして多数の研究が出され、展覧会も世界各地で開催されている。**2009** 年にはロンドンのテイト・ブリテンで大規模な展覧会 *Richard Long: Heaven and Earth* が開催され、**2017** 年にはロングの文章や研究者・キュレーターのロング論を収めた *Stones, Clouds, Miles: A Richard Long Reader* が刊行され、ロングの歩行作品の現代的意義に注目が集まっている。

ロングは、自身の歩行や作品にみられるイギリスのメンタリティや文化を強く意識する一方で、歩行の経験は想像力を通して他者に開かれるものであり、自身の作品はそのような想像力を養うものとも書いている。ロングは多くの作品を、「ホームランドスケープ」と呼ぶ、イギリス南西部に広がる荒野ダートムアで制作している。この「ホームランドスケープ」と世界各地の風景を、ロングは「補完的」なものであると考えており、日本の風景は、その「補完的」な風景の一つとして彼にインスピレーションを与えてきた。ロングは **1976** 年に日本で最初の作品を制作して以来、その後何度も来日して各地で歩行作品を制作している。**1996** 年には世田谷美術館と京都国立近代美術館で「リチャード・ロング 山行水行」展が開催され、書籍『リチャード・ロング 山行水行』が出版された。**1997** 年には直島のベネッセアートミュージアム及びベネッセハウス オーバルで 4 点の作品を制作した。**2013** 年には青森県立近代美術館における「種差 よみがえれ 浜の記憶」展のために、ロングは、黒く塗った壁に白い泥を手で塗りつける「マッドワーク」を公開で制作した。同展では、ロングが種差海岸を歩いて制作した彫刻を写した写真やテキストワークも展示された。この展覧会図録ではロング作品に関して論じられているが、日本側からのロングに関する研究は多くはなされてこなかった。また、ロング作品における「ホームランドスケープ」と日本の風景との関係は、ロング研究のなかでも看過されてきた。本研究は、この関係に注目する。

本研究ではまた、「ライン」の人類学を提唱し、歩行論も刊行した人類学者ティム・インゴルド、現象学的風景論を展開する考古学者クリストファー・ティリー、芸術と人類学の接続を目指すイメージ人類学の議論等も参照する。いずれの研究も、完全なる可視性の強制から、見えるものと見えないものを解放し、見えないものが見えるものへと形象化するプロセスや逆に脱形象化するプロセスを重視しつつ、形を残さないこと、見えないことの意味を深く問う研究である。ロングもまた自身の制作において、可視性と不可視性、完全性と不完全性のあいだのあらゆる段階を自由に用いているという。その段階において、不可視の歩行に彫刻や地図作品で形が与えられ、消散する彫刻が写真で記録され、足跡を残さない歩行に言葉が与えられる。可視性と不可視性、完全性と不完全性のあいだを自由に行き来するロング作

品は、可視を前提とし、永続性を求める芸術に対して問いを投げかける。本研究は、この問いに向き合い、見えるものの専制と完全性の暴力が支配する現代社会に対して、ロングの歩く身体のみによって生み出される芸術の意味を考察する。

人間は、他なるものに関わりながら、生を営む場所と場所をつないできた。そうして生じる関係性の「ライン」は始まりも終わりもなく、相互に絡み合いながら紡がれ、前出のインゴルドによれば「メッシュワーク」のような社会を現してきた。だが、完全性や進歩を主眼とする合理的で直線的な近代的思考は、地点と地点を直線的なラインで接続するネットワーク社会を出現させた。そのような社会では、地点と地点の「あいだ」で得られる経験に重きが置かれない。哲学者ピンチョル・ハンも「あいだ」がもつ豊かな意味が失われていると論じている。ロングはある「場所」で彫刻を作るが、その後また別の「場所」へと歩く。「場所」で彼が作る彫刻は、そこにいたるまでの歩行距離・時間、そして身体的経験や感覚も含まれている。つまり、「場所」と「場所」のあいだの歩行が、ロングの彫刻には含まれているのである。本研究は、ロングの「不完全」な歩行作品を、人間存在の痕跡としての「場所」を印しづけつつ消散させる「足跡の芸術」として捉え、その現代的意義を考察することにより、近代的思考のなかで喪失した「あいだ」を再生する一つの道を示したい。

## 2. 研究の目的

ロングは、永続性を期待する芸術のキャンノンに挑戦し、消散を前提とした彫刻を世界各地の地表に作り続けている。本研究は、ロングの作品を、「不完全性」の美学を根底に置く足跡の芸術として捉え、その芸術に現れる身体と風景・場所の関わり方を考察することにより、「完全性の暴力」が支配する現代社会に芸術を通して抗うあり方を提唱し、さらに人間存在の痕跡、その痕跡としての「場所」の問題を追究することを目的とする。ロングの芸術の創造性は、彼の歩行によってわたしたちが生きるための道を示し続けているところにあり、その足跡を追跡する本研究も、現代社会が失った人間の生の営みをつなぐ道と、その途上に現れる場所（と場所のあいだ）の再生を目指す。

ロングは地表の連続性を強く意識し、自らの歩行ラインが連続するものであることを強調する。「不完全」であるがゆえにロングの歩行は連続していくのである。そのライン上に日本の風景がある。前述したように、ロングは日本で多数の作品を制作しているが、その作品を詳細に論じた先行研究はほとんどない。本研究は、日本で創作されたロング作品に着目し、その作品がロングの芸術にもたらした意味についても探究する。

## 3. 研究の方法

当初、本研究は **2019** 年度～**2021** 年度を研究期間として実施する予定だったが、**2020** 年から新型コロナウイルスの蔓延が世界的に拡大したため、研究期間を **2023** 年度まで延長した。

### (1) イギリスでの研究調査

ロングの「ホームランドスケープ」であるダートムアでの現地調査を実施し、ダートムアの風景や地表、地形等とロングの歩行作品の関係を考察した。

ヴィクトリア・アンド・アルバート博物館ナショナル・アート・ライブラリー、テイト・モダン、テイト・ブリテン等で、ロングの作品や関連文献、およびイギリス現代美術の作品、関連文献を調査し、資料を渉猟した。

### (2) 共編著『日常のかたち—美学・建築・文学・食』の企画・出版

ロングが4点の作品(《一五夜の石の円》、《瀬戸内海の流木の円》、《瀬戸内海のエイヴォン川の泥の環》、《人差し指によるエイヴォン川の泥の環》)を制作した直島のベネッセアート

ミュージアムにて制作状況を含めた作品調査を行なった（《人差し指によるエイヴォン川の泥の環》はベネッセハウス オーパルの客室の壁に制作）。ロングはギャラリーや美術館等でも彫刻やマッドワークを制作する。本研究ではこのような屋内で製作された作品を、「消散」する屋外の作品と関連づけて考察した。この研究調査を踏まえ、ロングの彫刻を「日常の美学」研究と接続して論じた論文「足の跡、手の跡、息の跡 リチャード・ロングの彫刻における消散」を執筆した。ロングが自身の歩行にみる「芸術としての歩行」は、日常的な歩行とは異なるが、前者は後者の延長にある。だからこそ、私たちはロングの歩行作品に含まれる歩行の経験を想像することができる。また、ロングの彫刻の原則にある「消散」も、持続性を伴わない日々の営みと通底するところがある。消散は、日常が営まれてゆくための美学でもある。このような視点に立ち、上記論文を執筆した。

アメリカの大学の研究者を含む 16 名の執筆者の論文からなる論文集『日常のかたち—美学・建築・文学・食』（筑波大学出版会）を企画し、編集作業を行ない、出版した。上記論文「足の跡、手の跡、息の跡」を所収する。

### （3）歩行論・風景論・イメージ人類学との接続

ティム・インゴルドの「ライン」の人類学や歩行論、クリストファー・ティリーが唱える現象学的歩行や風景論、歩行文化に関する文献を渉猟した。また、芸術と人類学を接続したイメージ人類学のアプローチが有効であると考え、そのアプローチをロング研究に応用した。

### （4）イギリス美術史における「完全性」の美学と「不完全性」の美学

ロング作品にみる「消散」の美学、「不完全性」の美学は、18 世紀のロイヤル・アカデミー創設以来、イギリス美術が理想とした「完全性」の美学に対するアンチテーゼである。「完全性」の美学がイギリスに成立した背景と、その美学に対する抵抗が生じた背景を追究した研究発表「19 世紀イギリスにおけるラファエッロ—ラファエル前派からウォルター・ペイターへ」を美術史学会東支部のシンポジウム「ラファエッロとラファエロ主義」で行なった。

「消散」ないしは「不完全性」の美学がイギリス美術史においてもつ意味を問うために、ウォルター・シッカート（1860-1942）を取り上げ、彼が「料理」に例えた画面における「消散」「不完全性」の美学の現れを追跡し、論文「ミュージックホールと鉄製ベッド—ウォルター・シッカートの猥雑なインテリア」を執筆した。本論文を収めた編著『イギリス美術叢書 VI エロスとタナトス、あるいは愉悦と戦慄—ジョセフ・ライト・オヴ・ダービーからポール・ナッシュへ』を出版した。

### （5）英語での成果発表

研究成果を英語論文“**In-Between Places: Richard Long's Walk-Works on Dartmoor and in Japan**”を *Contemporary Aesthetics* と、“**Richard Long: Touching Stones with Stones, Touching Landscapes through Stones**”にまとめた。前者を *Contemporary Aesthetics*、後者を *Kritikos* に投稿し、両論文とも採択された。これら 2 本の英語論文に掲載する図版の著作権に関する手続きを、作品を所蔵する美術館やギャラリー、著作権協会を通して行った（2024 年度刊行予定）。

## 4. 研究成果

### 【図書】

1) 山口恵里子責任編集、山口恵里子、富岡進一、小野寺玲子、田中裕介、若名咲香、大久保譲『イギリス美術叢書 VI エロスとタナトス、あるいは愉悦と戦慄—ジョセフ・ライト・オヴ・ダービーからポール・ナッシュへ』（ありな書房、2021 年）262 ページ。

[山口恵里子「ミュージックホールと鉄製ベッド ウォルター・シッカートの猥雑なインテリア」145～188 ページ、247～250 ページ。]

2)山口恵里子・対馬美千子編、齋藤百合子、アン・マクナイト、ミリアム・サス、山口恵里子、半田るみ子、三宅敦子、長谷部寿女士、竹谷悦子、宮本陽一郎、中田元子、対馬美千子、馬籠清子、青柳悦子、五十嵐泰正、イ・ヒャンジン、ジュディス・パスコー『日常のかたち 美学・建築・文学・食』（筑波大学出版会、2023年）407ページ。（査読有）

[山口恵里子「序 日常のディアスポラ」1~14ページ。「足の跡、手の跡、息の跡 リチャード・ロングの彫刻における消散」88~129ページ。]

#### 【雑誌論文】

1)Eriko Yamaguchi, “In-Between Places: Richard Long’s Walk-Works on Dartmoor and in Japan.” *Contemporary Aesthetics (forthcoming)*. (査読有)

ロングがダートムアと日本で制作した作品を中心に、ロング作品における場所と場所、空と地表「あいだ」の意味について考察した。ロングは、素粒子物理学で論じられる、素粒子の相互作用と「対称性」にインスピレーションを受け、ダートムアでの歩行を鳥海山において反復し、テキストワーク《転移》を制作した。ロングの歩行が現した場所と場所の「あいだ」は、日本の風景を通して、素粒子と素粒子の「あいだ」の関係性へと連なることになった。だが、ロングの歩行作品が現し続けている「あいだ」は、消散するがゆえに永続せず、完全にもなり得ない。「あいだ」が喪失し、時空間が分断化された現代社会にあって、ロングの芸術は、わたしたちを常に「どこか」に導いている。

2)Eriko Yamaguchi, “Richard Long: Touching Stones with Stones, Touching Landscapes through Stones.” *Kritikos (forthcoming)*. (査読有)

ロングはどこにでもある「コモン」なマテリアルである石を好む。ロングは石に触れ、触れられることにより風景に触れる。そうして風景もロングに触れる。ロングは風景のなかを歩き、ある場所と出会い、その場所にある石で彫刻をつくる。ロングは日本でも石を用いた歩行作品を数多く制作した。だが、その彫刻を形作る石もやがてどこかに消散した。ロングにとって、そのような石は世界の流動を表すものとなった。また、石を交換する作品においては、石は素粒子の速度や質量、時間の関係性をも表すようになる。

#### 【研究発表】

山口恵里子「19世紀イギリスにおけるラファエッロ ラファエル前派からウォルター・ペイターへ」ラファエッロ没後500年記念シンポジウム「ラファエッロとラファエッロ主義」2021年4月10日 美術史学会東支部大会（オンライン）

リチャード・ロングが歩行中に制作する彫刻は、やがて形を失い、消散する。このような永続性を目指さないロングの「不完全性」の美学は、瞬時に場所と場所を繋ぐネットワーク社会が失った「あいだ」の意味、そしてその「あいだ」を歩き続けている人間の身体として存在する意味を再考させる。

今後は、ロングと同時代のイギリスのアーティスト、デイヴィッド・ナッシュ、ハミッシュ・フルトン、アンディ・ゴールズワージーらとの比較研究も行い、彼らが身体と風景ないしは場所を関係づける新しい美学を探究し、創出した過程を明らかにしたい。新型コロナウイルスの世界的な蔓延という状況により、イギリスで彼らの作品を十分に実見して調査することができなかったが、本研究の成果に基づき、上記アーティストとの比較研究も踏まえ、ロングの「足跡の芸術」についての研究を続行していきたい。

5. 主な発表論文等

〔雑誌論文〕 計2件（うち査読付論文 2件 / うち国際共著 0件 / うちオープンアクセス 1件）

1. 著者名 Eriko Yamaguchi	4. 巻 -
2. 論文標題 In-Between Places: Richard Long 's Walk-Works on Dartmoor and in Japan	5. 発行年 2024年
3. 雑誌名 Contemporary Aesthetics	6. 最初と最後の頁 -
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 -

1. 著者名 Eriko Yamaguchi	4. 巻 -
2. 論文標題 Richard Long: Touching Stones with Stones, Touching Landscapes through Stones	5. 発行年 2024年
3. 雑誌名 Kritikos	6. 最初と最後の頁 -
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

〔学会発表〕 計1件（うち招待講演 1件 / うち国際学会 0件）

1. 発表者名 山口恵里子
2. 発表標題 19世紀イギリスにおけるラファエッローラファエル前派からウォルター・ペイターへ
3. 学会等名 美術史学会東支部（招待講演）
4. 発表年 2021年

〔図書〕 計2件

1. 著者名 山口恵里子、対馬美千子、齋藤百合子、半田るみ子他	4. 発行年 2023年
2. 出版社 筑波大学出版会	5. 総ページ数 407
3. 書名 『日常のかたち－美学・建築・文学・食』	

1. 著者名 山口 恵里子、富岡 進一、小野寺 玲子、田中 裕介、若名 咲香、大久保 譲	4. 発行年 2021年
2. 出版社 ありな書房	5. 総ページ数 264
3. 書名 『エロスとタナトス、あるいは愉悦と戦慄—ジョセフ・ライト・オヴ・ダービーからポール・ナッシュへ』	

〔産業財産権〕

〔その他〕

-

6. 研究組織

	氏名 (ローマ字氏名) (研究者番号)	所属研究機関・部局・職 (機関番号)	備考
--	---------------------------	-----------------------	----

7. 科研費を使用して開催した国際研究集会

〔国際研究集会〕 計0件

8. 本研究に関連して実施した国際共同研究の実施状況

共同研究相手国	相手方研究機関
---------	---------